

IDEA ジャパン ニュースレター

ハンセン病患者・快復者や、
すべての人々の尊厳の確立
を目指して

2012年 9月15日発行 14号



8月9日に開かれた多摩全生園の納涼祭。園の外から大勢の人が参加し、盆踊りや花火を楽しんだ

IDEA 国際会議に参加して

理事長 森元美代治

3、4年に一度の割合で行われる IDEA 国際会議が、本年5月7日より5月11日までの5日間、IDEA センターの所在地、ニューヨーク州セネカフォールズで開催されました。IDEA ジャパンからは私たち夫婦が参加しました。今回の会議は IDEA センター事務局長アンウェイ・ローさんの呼びかけによるもので、世界中にあるハンセン病療養所のどこか1か所でもいいから世界遺産に登録できないか、調査検討したいということでした。20世紀、人類が犯した戦争、飢餓、病気等に対する数々の過ちの一つとしてハンセン病療養所の存在は、負の歴史的遺産として後世に残し、伝えることが重要だと考えたからです。

この世界遺産の考え方の発端となったのは数年前、台湾の新莊市にある楽生院が地下鉄敷設計画により、入所者が強制移転させられるという深刻な問題が惹起したことでした。これを阻止するために台湾政府に抗議運動を展開する過程で、楽生院をハンセン病の歴史資料館として永久保存させるために世界遺産に認定してもらおうしかないと考えたのです。

今や、世界のどの国においてもハンセン病の新発生患者が激減しているために療養所やコロニーが統廃合され

つつあります。IDEA が組織されている23カ国では、自分たちが偏見・差別に晒されながら過酷な境遇の中で生き抜いた証としてハンセン病資料館を作りたいという気運が高まっています。そこで IDEA センターではこうした世界的な気運の集大成として世界遺産登録を考えたのです。しかし、IDEA がめざす大きな問題提起をする今回の会議に参加したのは、自費参加できる日本、台湾、ブラジル、コロンビア、アメリカの5カ国だけでした。IDEA センターは、世界的不況のために活動資金が集まらず、各国代表を招待する余裕がなくなっているのです。

会議は通訳を含め19名で構成され、連日熱心な協議がなされました。ブラジルからは、各国の施設それぞれを世界遺産に登録申請してもらいたいという意見もありましたが、これは非常に難しい問題であり、IDEA センターとしてはとりあえず世界のどこか1か所だけに絞りたいとのことでした。その候補としてダミアン神父で知られるハワイのモロカイ島カラウパパ、フィリピンの国立クリオン療養所、韓国ソロクト療養所、台湾楽生院、日本の国立療養所等が挙げられました。

世界遺産の登録を目標に IDEA は、あらゆる人権問題との連携をメインテーマにして、資料収集や情報交換に努め、各国 IDEA と協力して活動を続けようという決意表明をして会議は終了しました。

甥御さんが会って下さった！

会員 難波 幸矢

瀬戸内ハンセン病人間回復裁判を支える会代表

宇佐美治さんとの出会い

宇佐美治さん（長島愛生園）とはハンセン病国賠裁判を通して知り合いました。宇佐美さんは原告（全国原告団の副団長）。私は邑久光明園にある日本基督教団光明園家族教会の教会員として長島に出入りし、裁判が起こった時「瀬戸内ハンセン病人間回復裁判を支える会代表」として彼と交流をするようになりました。

裁判が終わってお部屋を訪ねました。宇佐美さんは「ハンセン病問題検証会議・検討会議」の委員になったのに、会議に連れて行ってくれる人がいないと残念がっていました。ちょうどその日が空いていたので、ボランティアとして同行して以来、全国の療養所で開かれる同委員会に出席させて頂くことになりました。会議へ向かう道中、おしゃべりのしっ放しでした。



左から二人目が宇佐美さん、その右が難波さん
青森のハンセン病市民学会で／2012年5月

きっかけはお墓の話から

宇佐美さんは80歳を越えると、死を考えるようになったのでしょうか。それまで愛生園の納骨堂である万霊山に入るしかないと言っていたのに、「万霊山にだけは入りたくない」と言い出したのです。「ご実家とは縁が切れてるんだから仕方がないでしょ」と言っても「いやだ」と。「じゃあ難波家のお墓に入る？」と聞くと「おう、入れてくれ」と。

そこで私は、宇佐美さんが亡くなった後、愛生園と

トラブルがないように、「難波幸矢は宇佐美さんのお骨を引き受けることに同意しています」という文書を書き、お墓の写真と同封して、愛生園に出しなさいと渡しました。「何はともあれ60年余り、共に人権のために闘ったり泣き笑いしてきた仲間の眠る万霊山ではなく、難波家のお墓でいいのか、よく考えて下さいね。入ってから愛生園に戻りたいと言っても無理ですよ。それにうちのお墓には、姑も入っていて、プライドの高い人だから、ちゃんと御挨拶しなさいね」とも申し添えました。

次は親族の話

お骨の行き場所が決まって安心したのか、会う度に家族や近所の人を気にかけるようになりました。「甥（兄の長男）と死ぬ前に会いたい。甥たちは私のことを知らないんだ。私は墓参りに来てくれるなど言われている。親父が死んだ時に香典を送って叱られた。兄嫁には『お父さんとお母さんが死んだら縁を切ります』と言われている。自分がこの病気になったためにど

れほど親族に迷惑をかけたか申し訳ない気持ちがいっぱいで、どんな仕打ちも仕方がないと諦めているが、死ぬ前に甥に会いたい。甥が生まれた時、2階で寝ていた私のところへ、触ってはいけないけど見せてやると、ばば様が抱いて見せに来てくれた。しばらくして兄たちは家を出たから、それっきりだった」。

宇佐美さんの呟きと嘆きを受け止めて、私は甥御さんに手紙を書きました。「お墓の件は解決していますから、親族と近所のことなどを話しに来て下さい。決して迷惑はかけません。マスコミに知られてドラマティックな再会シーンなどにならないよう、そっと来て下さい。宇佐美さんは甥御さんに会われたら安心して逝かれると思いますから」と書きました。

甥御さんが偉かった！

宇佐美さんに住所を聞いても地番までは覚えていないし、平成の大合併で地名も変わってしまっているかもという中で手紙を出しました。郵便屋さんが「地番もないし名前も間違っていますが、お宅宛てだと思います」と言って届けてくれたとのこと。甥御さんは文面

を読んで、知らぬ存ぜぬで通そうと思えば通せし、「該当者なし」の郵便局印をつけて送り返してもよかったのですが、「行きます」と連絡をくれました。

すぐに宇佐美さんに連絡しました。「行くって!」「あ、そうか。どうせ来やせんよ」……来る約束のその日まで彼はそう言っていました。

甥御さんは重いお米を私のために持って岡山駅に降りたちました。よくぞよくぞ来て下さったと、あふれる思いでお迎えし、一路長島愛生園へ40キロ余りを車で向かいました。

立ったまま号泣

「ああ、兄貴にそっくりだ!」「初めまして。じい様とばあ様の写真を今まで60年余りも飾ってくれていたんですか」と書棚の、紋付き袴姿の二人の写真を見て言われました。宇佐美さんは興奮して、あの人は?

この人は?とか、下の甥の名前を聞いたり、生活状況を聞いたり、矢継ぎ早に質問攻めでした。

外に食事に出ても、周りの人に何事かと思われるほど興奮して大声になり、甥御さんの知らない親族の話やご近所の話になり、「叔父さんはよく覚えてますね」と言われながら答え、最後は私の家で一週間早い誕生日のお祝いにケーキを食べ、いっぱい話して、甥御さんを岡山駅まで送りました。

駅から長島までの間中「来たなあ、来たなあ、会えるとはなあ」と言うばかり。そして倒産したとか、離婚したとか、辛い人生だった親族の話になると「オレのせいだ」と言うのです。「何でもかんでも自分のせいにしないの。外界はいろいろあるのよ。自分で稼いで自分で食っていかないといけないでしょ。うまくいかない時もあるのよ」などと私が言っても、全部自分のせいだと言っていました。

すべてのことには時がある

実は私が手紙を出す前に、甥御さんは宇佐美さんのことを知る切っ掛けがあったのです。それを甥御さんのお手紙から引用します。

「叔父・治は、『幼い時に病気で死んだ』と祖母より聞かされておりました。……私が教育長になって半年ほど過ぎたころ、共産党の議員から『宇佐美治さんが、地域文化広場での講演に来るよ。先生の叔父様ですよね』と言われました。私は60年間、祖父母や両親から、ハンセン病で長島愛生園に収容されている叔父のことは、全く聞かされていませんでした。祖母や

父母の心情を思うあまり、議員の前で涙があふれて止まりませんでした。後日分かったことですが、知らなかったのは私たち夫婦だけでした。私はすぐにも会いに行かねばと思ったのですが、悩みました。家内にもなかなか話すことができず……。私は教育長という立場上、政治活動やマスコミの餌食になるのを避けたいと思いました。いや、公になるのを恐れたように思っています」。

宇佐美さんに会って、帰られてから、甥御さんから次のような手紙を頂きました。

『『野道の草』(宇佐美さんの著書)を一気に読みました。祖父母や父母や叔父の心情を思い、涙を浮かべながら真剣に、久しぶりに精読しました。……難波さんから頂いた手紙で、愛生園へ面会に行く勇気を与えてもらい、人間としての差別意識を再度勉強する機会となりました。そして私の知らなかった宇佐美家の歴史の一端を聞くことができ、我が家の歴史の空白を埋めるものとなりました。多くの皆様に支えられ、ハンセン病絶対隔離政策に立ち向かい、国賠裁判やハンセン病補償法の成立などに尽力した叔父を誇りに思っています。……市長と二人で話す機会があり、勇気をだし、叔父のことを涙を流しつつ話しました。今まで胸につかえていたことが徐々に少なくなっていくように思えました。講演の講演を時々させて頂いていますが『私の叔父はハンセン病だった』という題で話せそうな気がしています』。

すごい人です。甥御さんは本当に偉かった。腹をくくり叔父さんに向かいあった! どれほどの決心か! 政治家も記者も、ともすると土足で人の心に踏み込むようなところがあり、私はひたすら、あっちにも人権があるのだ、家族を守らねばならないのだと、甥御さんへの他人の介入に本当に慎重でした。けれど、すべてのことには時があって、家族が関係の回復を成し遂げることができました。私は2009年の奇跡だと思っています。それもこれも甥御さんの勇気のおかげです!

おかげさまで、甥御さんから「先祖のお墓にどうぞ入って下さい。墓参りに来て下さい」と言ってもらい、ご両親のお墓の前で長い時間深々と宇佐美さんは頭を垂れていました。仏壇にも蠟燭と線香とお土産を供えることができました。

一つ家族のように絆を結びましょう

寺島 洋子（元小学校長）

「間違っている」「おかしい」と体いっぱい私たちに訴える森元美恵子さんの声が今も蘇り、「私にもできることをやり続けて行こう」との気持ちを新たにしています。また、静かに真実を法律や科学的な知見に照らして訴え、さらに IDEA ジャパンの活動を紹介する中で、世界的な現状も交えながら分かりやすく語ってくれた森元美代治さん。「これから多くの方々に伝えてあげてください」と心から願うとともに、ささやかでもそんな活動を応援したいと願っています。

美恵子さんは日本人のお父さんをもつ、セレベス島生まれのインドネシアの方とのこと。前日の交流会で初めてお会いしましたが、お父さんゆずりの日本人のお顔で、たいへん気さくに親しく話され、年齢も近いこともあり、以前からのお友達のように感じました。その森元さんご夫妻の「ハンセン病を生きて」こられたお話は、戦後のどさくさの中ではなく、私と同じ世代を生きてこられたお二人への厳しい差別そのものでした。

これだけ人権が大事に唱えられている今の世の中に、まだまだ根強く、脈々と続く差別の不条理さを痛感しました。外国ではすでにプロミンという薬もでき、強制隔離などとてもない政策として、日本に対して「らい予防法の廃止」への強い働きかけもあったというのに、ハンセン病への厳しい偏見・差別は、今も日本の社会にそのままつながつているのです。

第一「らい予防法の廃止」がこんなに遅くなってしまったこと、そして法律が廃止されてもなおかつ、ハンセン病に関わる皆さんの人権が復活できないということは、ほんとうにおかしいです。お二人がさらされた心と体の痛み、苦しみの大きさに、「なぜ、こんなことが起こっていたのだろう」と、改めて人の尊厳への侵害を見過ごしてきた自分自身の無知を申し訳なく思いました。そんなことがまかり通ってきた日本の社会自体に大きな憤りを覚えます。

特にお二人のご家族や親せきの方々とのやり取りでは、自分の足元をすくわれるような頼りなさ、悔しさなど、言葉では表現できない深い悲しみを抱かれたことでしょう。森元さんに紹介していただいた、『うまれてはならない子として』（宮里良子著、毎日新聞社刊）

の中で、良子さんが語る「心の逃亡者」という言葉にも心が痛みました。ハンセン病の両親を持つがゆえに、「良子」と「条子」の二重の人格として生きることを余儀なくされてきた良子さん。このように今まで語りができなかった方々が、ようやく少しずつ語ってくださるようになっていきます。講演会と同時に開催された「八重樫信之写真展『それぞれのカミングアウト』～ハンセン病回復者～」にも多くの心の叫びを感じさせられました。

それほどまで大きな差別と偏見、仕打ちが、私たちの見えないところで続いていたのです。ハンセン病にまつわる多くの過ちが生んだ、大切な家族や故郷との絆さえ断ち切らなければ生きていけなかった方々の取り返しのつかない不幸を、無駄にしてはいけないと思います。

東日本大震災の後、原発問題が日本の社会を揺るがしている今、日本の政府や学識経験者とされる方々の言葉も、どこか信じ切れない風潮がありますが、「自分に直接関係していない」という見方、感じ方が、人を不幸に陥れ、自身をも危うくしてしまうことに気づき、互いに人と人との絆をさらに強く結ぶ世の中にしていかなければならないと思います。

今回の講演会には、長野と東京の学校の若い先生方もいらっしゃって、大変うれしく思いました。やはり子どもたちにこそ真実を伝えて、二度とこのような過ちを繰り返さないようにしなければなりません。先生方が心を動かされ、子どもたちに伝える言葉は、きっと子どもたちの心に種を蒔き、いつか花開いてくれると信じています。そして森元さんが生の声で訴えられたことは、さらに心に沁みていくものです。だからこそ「今」なのです。回復者の高齢化が進んでしまった今、日本の国家そのものの大きな「過ち」を「今」のうちに、次の世代に伝えていかなければなりません。そんな意味でも教育の力が期待されます。

今回、私は「心を揺さぶる言の葉」を持つ美恵子さん、「静かに、けれど確かに燃える心」を持つ森元さんご夫妻に出会い、日常の生活に埋没しそうな自分にカツを入れられ、新たなエネルギーを頂きました。いつか全生園を訪ねて、またお二人にお会いしたいと思います。そして同じ思いを持つ皆さんと共に、一つ家族のように良い時間を共有して、少しずつでも幸せで住み良い社会をつくっていく「仲間」をつくっていききたいものです。

♪♪ 花さき保育園が開園 ♪♪

～全生園の新しい1ページが始まる～

理事 佐川 修

多磨全生園入所者自治会長

社会福祉法人土の根会・花さき保育園の新園舎が本年7月1日に完成し、祝う会が開催されました。思えば4年前、2008年6月の国会において「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」、いわゆる「ハンセン病問題基本法」が全会一致で可決されました。その1ヶ月後の7月、さらに10月には文書をもって花さき保育園の新理事長と森田園長が、多磨全生園入所者自治会にお見えになり、「基本法の精神を活かして全生園の中に保育園を建てさせていただきたい」との要望がありました。

自治会では早速、施設長である松谷有希雄園長や、渡部尚東村山市長にも相談して、保育園を受け入れることを決め、翌2009年3月に10団体で構成している「多磨全生園将来構想検討委員会」を開催しました。そこで「人権の森構想とともに保育園の誘致を全生園の将来構想として推進したい」と提案したところ、即座に満場一致で承認されました。

それ以来、入所者自治会では全国ハンセン病入所者協議会の行動があるたびに、また折にふれて厚生労働省や国会議員の先生方に要請行動を続けてきました。その結果、難問であった借地料の問題も解決し、多磨全生園の南西の角地2000平米を、1平米あたり1329円で貸し出すことが決まりました。そこで整地して、公募したところ、花さき保育園に貸し出すことが決まったのです。その時は、内心ホッとした思いでした。

私たちは子どもがいません。持つことを許されませんでした。だから子どもたちの元気な声を聞くと、「もし自分たちに孫やひ孫がいるとしたら、こんな思いであろうか」と非常に心の和む思いがします。

子どもは国の宝です。花さき保育園の開園式には小宮山洋子厚生労働大臣もご出席くださいましたが、小児化問題や児童手当など子ども対策に熱心に取り組んでおられる小宮山大臣には、次代を担う子どもたちがのびのびと生育できますように、さらにご尽力いただきたいと願っています。

多磨全生園の入所者は、現在250人と激減し、平均年齢も83歳に達しました。私たちに残された時間はそう長くありません。人生最後の曲がり角に来て、子どもたちの元気な声を聞き、人間らしい気持ちを取り戻して過ごせる機会を与えられたことは、私たちにとっては何よりの贈り物だと、感謝の気持ちでいっぱいです。

多磨全生園の新しい1ページが始まりました。保育園開園のために何かとご尽力、ご支援いただいた多くの関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。



開園した花さき保育園

写真パネル「輝いて生きる」を貸し出しています。

輸送費のみご負担下さい。ご希望の方は八重樫信之 理事までご連絡下さい。

携帯： 090-7422-2052

E-mail : nanya50@ca2.so-net.ne.jp

平成 23 年度 事業報告書

平成 23 年 4 月 1 日から平成 24 年 3 月 31 日まで

1. 事業の成果 (1) ハンセン病に対する差別・偏見除去のための啓発事業、(2) 国内外のハンセン病患者・快復者との交流及び支援事業、(3) ハンセン病関係の資料の収集・情報提供事業、の三事業を事業計画として掲げ、取り組んだ。

(1) 啓発事業については、①講演、②写真展の開催、③フィールドワーク(園内案内)と国立ハンセン病資料館における説明、の3つが主なものであった。

①講演等については、森元美代治理事長が48回、村上絢子事務局長が勝訴判決10周年記念のシンポジウムでパネリストを務めた。九大の東アジア学会で八重樫信之理事がスライドショー、村上絢子事務局長が研究発表を行なった。②写真展については、八重樫信之理事が撮影した『輝いて生きる』の写真展を国内で5回開催した。③フィールドワーク(全生園と国立ハンセン病資料館案内)は、IDEA ジャパンに説明依頼があった団体に対して、森元理事長が18回案内し、説明した。④その他の活動については、クリオン島へ子供服と老眼鏡を送付した。塔和子展(詩人、大島青松園)に寄付をした。学生ボランティアグループのFIWCに寄付をした。東日本大地震の被災地、宮城県唐桑の施設を訪問し、洗心会に寄付をした。

上記①～③の受益対象者は合計約1万人を越え、啓発の面に関して国内外で多大な成果を上げた。

(2) 国内外のハンセン病患者・快復者との交流及び支援事業については、①生活改善のための支援(交流及び支援)、②奨学金支給、の二つが主なものであった。①については、HANDA(IDEA中国)、IDEAインド、IDEAフィリピン(クリオン島)へ生活改善資金を提供した。また2011年5月に沖縄県宮古島市と名護市で開催された第7回ハンセン病市民学会に理事長、理事、会員多数が参加した。

②については、HANDA(IDEA中国)、IDEAインド、IDEAフィリピン(クリオン島)、IDEAネパール、インドネシアの学生に奨学金を支給した。

(3) ハンセン病関係の資料の収集・情報提供事業については、①IDEAジャパンのニュースレター11号、12号の発行、ホームページによる情報発信 ②資料提供がある。

①ニュースレター11号は東日本大震災の特集号で、各国のIDEAメンバーから届いた、心のこもった応援メッセージを掲載した。

12号は、宮城県気仙沼市唐桑にある社会福祉法人洗心会の創設者、鈴木重雄さん(ハンセン病快復者)の人生の一端、鈴木さんを敬愛して、被災地に集まった若者のグループ(FIWC)の活動、地元・唐桑での洗心会の事業などについて、山口和子理事が執筆した。門屋和子さん(会員)は、東日本大地震で被災した故郷の惨状を知り、居ても立ってもいられない気持ちで、洗心会をボランティアとして訪ねた報告を寄せた。富田美代子さん(監事)は、台湾楽生院の自救会会長宅にホームステイして、楽生院の現状をレポートした。

12月2日におおばの会(東日本退所者の会)の要請で、横浜駅東口地下のイベント会場で開催された「人権メッセージ展」で展示した写真『輝いて生きる』と、国立ハンセン病資料館で開催した写真展『輝いて生きる』10月1日～10日を紹介した。いずれもカラー写真が好評だった。

ホームページは、自動翻訳機によって、英語だけでなく世界各国の言語で読めるようになって、各国のIDEAメンバーに好評だった。

②資料提供については、恵泉女子大学教授でクリスチャンの荒井英子さんの遺稿集『弱さを絆に ハンセン病に学び、がんを生きて』を関係者に贈呈した。

IDEA ジャパン会計報告（2011年度）

平成23年4月1日から平成24年3月31日まで

<収 入>

入会金		2人	2,000
年会費	正会員	37人	185,000
	賛助会員	26人	52,000
	特別賛助会員	0人	0
	特別正会員	0人	0
寄付金		34人	1,188,997
利息			142

合計			1,428,139
----	--	--	-----------

<支 出>

1 事業費

(1) 啓発事業	710,545
(2) 支援事業	911,200
(3) 情報提供事業	262,624

合計	1,884,369
----	-----------

2 管理費

給料手当	240,000
消耗品費	63,662
会議費	54,213
通信運搬費	84,935
印刷製本費	48,535
雑費	8,190

合計	499,535
----	---------

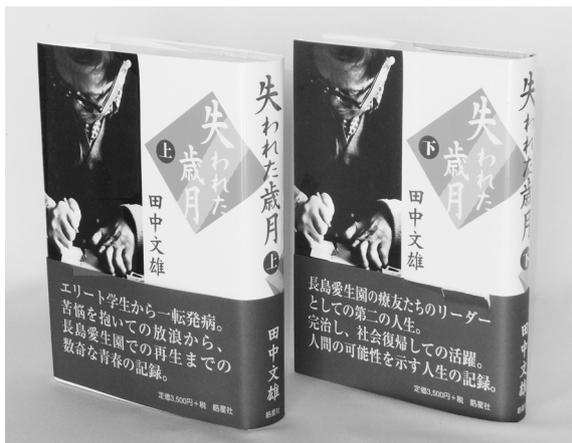
支出合計	$1,884,369 + 499,535 = 2,383,904$
------	-----------------------------------

<残 高>	$1,428,139 - 2,383,904 = - 955,765$
-------	-------------------------------------

<前期繰越金>	3,091,390
---------	-----------

<累計残高>	$- 955,765 + 3,091,390 = 2,135,625$
--------	-------------------------------------

トピックス



『失われた年月』 田中文雄著
上下巻 各定価 3,500 円+税
皓星社刊 電話 03-5306-2088

◆ ニュースレター 12 号で山口和子理事が、「2005 年、皓星社から出版されたこの本は、上下巻それぞれ 500 ページを超えるボリュームですが、2001 年に発見された 2,000 枚に上る自筆原稿をもとにしており、読み始めるとページを閉じることができないほど迫力がある書物ですが、在庫ゼロなので、再版の実現を期待しています」と紹介された洗心会の創設者・鈴木重雄（田中文雄）さんの自伝が、このたび新装、再版されました。

<帯より>

上巻：エリート学生から一転発病。苦悩を抱いての放浪から、長島愛生園での再生までの数奇な青春の記録。

下巻：長島愛生園の療友たちのリーダーとしての第 2 の人生。完治し、社会復帰しての活躍。人間の可能性を示す人生の記録。

◆ 森元理事長、水藤一彦理事が、大学時代のゼミ仲間と一緒に東日本大震災の被災地（岩手県宮古市、陸前高田市、宮城県石巻市、気仙沼市）を訪問しました。

「現実に被災地に立ってみると、テレビの映像と大違いです。いかに大きな地震に襲われたか、津波の勢いが凄まじかったかを目の当たりにして、災害の恐ろしさと、被災者の皆様の悲しみを実感しました」／森元美代治

会費納入のお願い

秋冷の候、皆様にはいよいよご壮健のことと拝察申し上げます。いつも IDEA ジャパンの活動にご理解・ご支援を賜り、感謝申し上げます。

さて、このところ事務処理が滞っていて、年を越してから会費納入のお願いをしておりましたが、今年度からは極力上半期までにお願ひさせていただく所存です。7 ページの会計報告にありますように、現在会費収入が減少していて、活動を続けるには、寄付金に頼らざるを得ません。まことに恐縮でございますが、会費を振り込んでいただきますよう、お願ひ申し上げます。今後ともご支援のほど、よろしくお願ひいたします。

理事長 森元 美代治

発行責任者：森元 美代治
特定非営利活動法人 IDEA ジャパン
<http://www.idea-jp.org/>
事務局：
〒 204-0012 東京都清瀬市中清戸 4-847
中清戸 4 丁目アパート 7-605
Tel&Fax 0424-93-6105

編集後記：村上 絢子

今年のハンセン病市民学会の家族部会で、宇佐美治さんが完全にカミングアウトしたと報告がありました。親身になって宇佐美さんをサポートし、甥御さんと真心で接してきた難波幸矢さんがいたからこそです。

難波さんだから書けた、心に沁みる文章で、2009 年の奇跡そのものです。

E-mail info@idea-jp.org
FAX 04-2925-8165